

北原徹教授記念号に寄せて

北原徹先生は立教大学経済学部において、長年にわたり教育・研究の向上と発展に尽力され、経済学部の発展と充実に大きく寄与されました。その北原徹先生の功績を讃えて、本記念号を発刊いたします。北原徹教授記念号をここに発刊できることは、経済学部にとって大変に名誉なことです。

北原徹先生は、1968年3月に福岡県立八女高等学校を卒業し、一橋大学経済学部に進学されます。一橋大学に進学された当初は、将来商社マンとして海外で大きな仕事をするのが希望だったそうです。学部時代はハードなゼミナールでの勉強に明け暮れ、自分自身の頭で考えた意見を発言すべきこと、これを徹底して学ばれました。先生はゼミナールで学問の世界の厳しさを実感したと述べています。こうした勉強を通じて先生は研究者の道を目指すことを決心し、1972年4月に一橋大学大学院経済学研究科理論経済学専攻の修士課程に進まれます。修士論文の作成では、24時間論文のことだけを考え、執筆に没頭された日々の中で、苦労と同時に研究の面白さや手応えもまた感じられたそうです。夜を徹して論文を執筆した日の夜明け前、疲れた心身に、時々刻々変わりゆく空の青の美しさが沁み込んだと伺いました。先生は引き続き博士課程に進み、本格的に金融理論とその現状分析研究を深められます。そうした研究成果の一端が「不安定性原理について」と題されて『高知大学学術研究報告』（第25巻社会科学第8号、1977年3月）および『海南経済学』（第5号、1977年3月）にそれぞれ(1)、(2)として掲載された論文でした。

こうした優れた研究成果を評価され、北原徹先生は博士課程2年在学中で高知大学人文学部専任講師に採用されます。1976年3月に一橋大学大学院を中途退学し、先生は高知大学に赴任しました。1978年4月には助教授に昇格され、先生は主に貨幣の循環的流通構造と金融政策の研究を進めます。その後の1984年4月に高知大学から東京学芸大学教育学部助教授に転じられ、1996年には教授に昇格されました。東京学芸大学時代には、銀行の戦略的行動を軸にした日本のバブル経済分析や金融危機に関する研究を精力的に手掛けられています。これらの研究成果は『東京学芸大学紀要』や『経済動態と市場理論的基礎』（日本経済評論社、1992年）、『国際化する日本金融』（時潮社、1992年）、『金融脆弱性と不安定性』（日本経済評論社、1995年）などの共著書を通じて公表されました。

さらに北原徹先生は1999年4月に東京学芸大学から立教大学経済学部経済学科に証券経済論

担当の教授として着任されます。本学経済学部は2002年4月に会計とファイナンスの両方を重点的に学ぶ日本で最初の会計ファイナンス学科を新設しますが、先生は同学科の新設にも力を尽くされ、設立後は同学科教授として新学科の発展に大きく寄与されました。2005年4月には会計ファイナンス学科長に就任され、揺籃期の同学科の中心として活躍されました。また、会計ファイナンス学科新設と同じ2002年4月に、立教大学はビジネスの構想力と戦略的思考を育成・開発する社会人向け大学院としてビジネスデザイン研究科（MBA コース）を新設します。先生は同研究科の開設時から専任教授として社会人大学院生の教育に携わり、2007年にDBAコースが設置されると、博士課程後期課程教授として多くの大学院生の育成にも尽力されました。

本学経済学部教育の伝統がゼミナール教育にあることは良く知られていますが、北原徹先生が心血を注いで指導した北原ゼミナールは、熱心に勉強する「ガチゼミ」として経済学部でも有名なゼミで、全日本証券研究学生連盟が主催し、日本証券業協会が協賛して毎年開催される証券ゼミナール大会においては、多数の優秀賞を受賞する常勝ゼミでもありました。また、先生は野村證券株式会社と連携した企画講座B（マーケットの時代と証券ビジネス）も長く担当され、証券ビジネスを通じた実践的教育の担い手でもありました。

本学経済学部時代の北原徹先生の研究は、金融の証券化・市場化やサブプライム金融危機などより現代的かつ実際のテーマに絞られて進められました。これらの研究成果は、「金融システムの市場化について」（『立教経済学研究』第60巻第3号、2007年1月）、「証券化・市場化と現代金融」（『信用理論研究』第25号、2007年12月）、「サブプライム金融危機と証券化のリスク分担機能」（『証券経済学会年報』第45号、2010年7月）など『立教経済学研究』や学会誌に旺盛に発表された論文から、その一端を知ることができます。このように本学経済学部での先生は、研究および教育の両面を通じて経済学部の充実に大きく貢献する存在でした。また、学会活動でも高知大学専任講師就任と同時に会員となった理論計量経済学会を皮切りに、金融学会、証券経済学会、ファイナンス学会、信用理論研究会などの学会に所属し、学会報告や論文発表を通じて学会および当該分野の学問発展に寄与されました。

ここまで北原徹先生の研究と本学経済学部での研究・教育について簡単に振り返りました。最後に先生の謙虚で率直な人柄についてご紹介したいと思います。先生は経済学部退職を機に大学院経済学研究会が発行する『立教経済学論叢』第80号に「研究生活を振り返って」と題する特別寄稿を寄せました。その中で激動した1970年代から2000年代の金融・証券市場を分析されたご自身の研究と現状分析を振り返り、「将来の見通しを立てることは、経済学研究の本体ではないと思うが、経済学をやっている、見通しが大きく外れて悔しいなど感じるものが何度もあった。そうした悔しい経験について、少し述べてみたいと思う」と記して、ご自身の研究を率直かつ公平に振り返り、その見通しと現実との齟齬を包み隠すことなく批判的に検討されています。そして「歴史は確定的なものではない。必ずゆらぎを伴っており、その中である小

さな要素が歴史の展開の大きな方向性を左右するかもしれない。従って後知恵的に歴史の展開を解釈することは可能であろうが、将来を見通すことは原理的に不可能である。経済学も基本的には現に起きたことを分析する学問である。こう割り切れれば、経済の局面転換や今後の推移について私が見通しを誤ったのは仕方のないことである。とは言え、経済学を専門に研究している身としては、悔しいと感じるし、先を見る力がもう少しは欲しいと思う」と特別寄稿を結ばれています。ひとは往々にして「自己省察」などと簡単に口にしますが、多大な研究成果をあげられてなお、こうして率直かつ批判的に自らの研究を省察し、それを公にされる先生の研究姿勢は、単なる人柄を超えた「意味」として私たちの胸に迫ります。先生がこの特別寄稿を大学院の『立教経済学論叢』にあえて寄せられたその思いを、これからの立教大学および経済学部の研究と教育を担う私たち全員が深く胸に刻み、共有していかなければならないと感じます。北原徹先生がこれからもご健勝でますますご活躍されることを祈念して、本記念号の発刊の辞に代えさせていただきます。

2015年12月

経済学部長 須永 徳武